

音に関するトロープ理論

松崎 俊之*

The Trope Theory on Sound

Toshiyuki MATSUZAKI*

**Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580, Japan*

序

「音とは何か」という問いに対し、哲学の立場から回答を与えようとする試みが「音響哲学 (philosophy of sound)」であるとまずは暫定的に捉えることができるが、それぞれの論者が依って立つ哲学的立場の違いに応じてその試みは多様な広がりを見せている⁽¹⁾。そうした音響哲学理論のひとつに、本稿で主題的に取り上げる、音を何らかの対象が具える特性と見なす、音に関する特性理論 (the property theory on sound、以下「特性理論」と略称する) がある⁽²⁾。

特性理論は、音を音源となる対象 (e.g. ベル) の具える特性と見なす「対象特性理論 (object property theory)」と、音を出来事 (e.g. ベルを叩くという出来事) の具える生起的特性 (occurrent property) と見なす「生起的出来事特性理論 (occurrent event property theory)」とに大きく二分され、前者はさらに、音を音源となる事物の具える生起的特性と見なす生起的対象特性理論 (occurrent object property theory) と、音を音源となる事物が潜在的に具える傾性的特性 (dispositional property) と見なす傾性的対象特性理論 (dispositional object property theory) とに二分されることになる⁽³⁾。

上に挙げた特性理論の下位区分を整理するならば、以下ようになる (なお括弧内に各理論を代表する論稿を挙げた)。

(1) 対象特性理論

① 生起的対象特性理論 (Pasnau [1999]: 316, Roberts [2017])

② 傾性的対象特性理論 (Kulvicki [2008]: 2, [2015]: 206)

(2) 生起的出来事特性理論 (Leddington [2019])

ここであらためて上記の各種理論をその妥当性の点から評価するならば以下ようになる。

まず(1)対象特性理論に関して言うならば、これは上に見たように、音をたとえばベルのような音源となる対象の具える特性と見なす立場であると言えるが、本来対象としてのベル自体は音をもたず、そのベルが叩かれることによって初めて音が生起すると考えられることから、この理論は妥当性を欠くと言わざるをえない (see Leddington [2019]: 621, n.1)。となれば残るは(2)生起的出来事特性理論ということになり、少なくとも現時点では、各種特性理論のなかでこの生起的出来事特性理論がもっとも妥当性の高い理論と見なされることになる。

生起的出来事特性理論を信奉する論者はレディングトン唯一人であることから (see Leddington [2019]: 624, Kwok [2020]: 62)、Leddington [2019]に関して詳細な批判的検討を加えることで生起的出来事特性理論をさらに鍛え上げ、それによって私はあらたに音に関する統合特性理論 (the integrated property theory on sound、以下「統合特性理論」と略称する) を打ち立て、その骨子を松崎 [2023]に示した⁽⁴⁾。

さて特性理論一般に対しては、とくにオキャラハンから厳しい批判が寄せられているのであるが (O'Callaghan [2007], [2021])、統合特性理論が特性理論の一種であるかぎりにおいて、彼の批判は統合特性理論もその射程に収めるものと言える。

こうした問題状況を踏まえることで本稿の課題が設定されることになる。すなわちその課題とは、特性理論一般に対するオキャラハンの批判に

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

対して統合特性理論はいかに応ずることができるのかを検討し、仮にそれが十全な仕方に応ずることができないとするならば、あらたにいかなる方途を探るべきかを考究することに他ならない。

上記の課題をめぐって本稿では具体的には以下の手順で議論を展開することにする。まず統合特性理論の概要を示したうえで (1)、特性理論一般に対するオキャラハンの批判を検討する (2.1)。ついでオキャラハンの批判に対する統合特性理論からの応答可能性を探ることで、結局のところ統合特性理論によるのではオキャラハンの批判を全面的に斥けることは不可能であることを明らかにする (2.2)。この結果を承けて、音をトロープとして捉える音に関するあらたな特性理論 (音に関するトロープ理論) を構築し、それをもとにオキャラハンの批判を全面的に斥けることを企てる (3)。

1 統合特性理論の概要

本節では、松崎[2023]における議論をもとに統合特性理論を構成する主要な論点を個々に確認することで、その概要を呈示することにする。

(1) 統合的特性としての音知覚的特性

知覚的特性としての音 (音知覚的特性) は、音強、音高、音色という三つの契機が一つにまとめ上げられた統合的特性としてある^{(5),(6)}。

その持続時間とおして音強、音高、音色という三つの契機はそのいずれもが変化しうるが (少なくともいずれかひとつの契機、最大で三つすべての契機が変化しうる)、それは音知覚的特性が本質的に時間的存在であることに起因するものと考えられる。

(2) 音知覚的特性の現象形式

時間と空間は音知覚的特性にとってその現象形式 (form of phenomenon) としてある。音知覚的特性にとってその現象形式をなす時間と空間はいずれも主観的契機としてあり、別言するならば、経験主体との関係においてはじめて成立するものと言える。

音知覚的特性にとってその現象形式をなす時間と空間についてより具体的にその要点をまとめるならば以下になる。

① 時間的契機：持続

同じ音源に起因する音であったとしても、その

音強感度を異にする聞き手の間ではその音の持続時間は異なることになる (see 松崎 [2023]: 38-9)。

② 空間的契機：距離と方向

音知覚的特性の距離と方向は聴覚主体を原点とする「自己中心的空間 (egocentric space)」において規定される。

(3) 音知覚特性が帰属される対象

統合特性理論の理解にしたがうならば、音知覚的特性を具える対象、すなわち音知覚的特性が帰属される対象は、その原因となる出来事 (event)、より具体的に述べるならば、ある音源が媒質を攪乱することで圧力波 (音波) が発生するという出来事であるということになる。

上の(2)に指摘したように、音知覚的特性にとって時間と空間はその現象形式としてあるのだが、それとは対照的に、出来事にとって時間と空間はその存立形式 (form of subsistence) としてある。現象形式としての時・空間と存立形式としての時・空間との決定的違いは、前者があくまで主観的契機としてあるのに対し、後者が客観的契機としてあり、そのかぎりにおいて経験主体との関係なしにそれ自体で成立する点にある。

出来事にとっての存立形式をなす時間と空間についてより具体的にその要点をまとめるならば以下になる。

① 時間的契機：出来事の開始点から終結点までの時間的広がり (持続)

② 空間的契機：出来事の空間的定位 (位置)

2 特性理論一般に対する批判

特性理論一般に対しては、とくにオキャラハンから厳しい批判が寄せられているのであるが (O'Callaghan [2007], [2021])、統合特性理論が特性理論の一種であるかぎりにおいて、彼の批判は統合特性理論もその射程に収めることになる。そこで本節では、特性理論一般に対するオキャラハンの批判を個々に検討したうえで (2.1)、それらに対して統合特性理論からいかなる応答が可能であるかを探ることにしたい (2.2)。

2.1 特性理論一般に対するオキャラハンの批判

特性理論に対するオキャラハンの批判の基盤を

なしているのは、音を特性としてではなくあくまで個別的な個体 (particular individual) として捉える彼の理解であると言える (O'Callaghan [2007]: 17)。本項ではこのオキャラハンの理解を一つの導きとして、「音の個性性の問題」をめぐって考察を繰り広げることにはしたい。

「音の個性性の問題」の核心は、音は個体であるかあるいは特性であるか、別言するならば、音は個別者 (particular) であるか普遍者 (universal) であるかという点にある⁽⁷⁾。音は特性ではなく個別的な個体であるというオキャラハンの理解が依って立つ論拠としては主として以下の三点が挙げられるが、それらの論拠はそのままに特性理論に対する個々の批判点となる。

(1)特性理論によるのでは「要素的諸特性の結合問題」は解決できない

音を音高、音強、音色という要素的特性からなる複合的特性として捉えんとするならば、こうした理解のもとでは、音高、音強、音色という要素的特性はいかなる仕方で一つの音のもとに結びつけられるのかという、いわゆる「結合問題(binding problem)」が生ずることになる (see O'Callaghan [2021]: § 2.1.3)。

オキャラハンも指摘するように (O'Callaghan 2007: 17-19, O'Callaghan 2021: § 2.1.3)、音が個体 (個別者) であるとするならば、そうした個体 (個別者) としての音が音高、音強、音色という特性の担い手となって、そのもとでこれらの特性が結合される可能性が拓ける。それはちょうど、たとえばトマトという個体 (個別者) が色彩、形状、重量といった諸特性の担い手となって、そのもとでこれらの諸特性が結合されるのと同様である。

しかしながら特性理論の理解では、音高、音強、音色という要素的特性から構成される音は個体 (個別者) ではなく、あくまでそれ自体が特性 (普遍者) であり、そのかぎりにおいて音は音高、音強、音色という要素的特性の担い手とはなりえず、したがって、音のもとで音高、音強、音色という諸特性が結合されることはない。

(2)特性理論によるのでは音の本質をなすその時間的性格を説明できない (O'Callaghan [2007]: 22-3)

普遍者としての特性は本質的に非時間的な存在

者であり、そのかぎりにおいて特性それ自体が時間をとおして変化したり、消滅したりすることはない。

それに対し音は、本質的に時間的な存在者としてあり、時間をとおしてさまざまな変化を被りうる。音が本質的に時間的な存在者であるのに対し、特性が本質的に非時間的な存在者であるとするならば、音は特性ではないということになり、音を音源もしくは音源が媒質を攪乱することで圧力波 (音波) が発生するという出来事の具える特性と見なす特性理論は誤ったものとして斥けられなければならないことになる。

(3)音は複現可能なものではない (O'Callaghan [2007]: 21)

オキャラハンによれば、普遍者 (universal) がさまざまな事物によって例化されうる複現可能 (repeatable) なものであるのに対し、音はそれぞれ別個のものとしてあり、そのかぎりにおいてそれは複現不可能 (unrepeatable) なものであることから、音は普遍者ではなくあくまで個別者 (particular) であるということになる (O'Callaghan [2007]: 21-2)。

特性が普遍者であるかぎりにおいて、音を特性と見なす特性理論は、音を個別者としてではなく普遍者として捉えることになるため、特性理論のもとでは、音は複現可能なものと解されることになるが、こうした理解は音の本質的な在り方を捉え損なうものと言わざるをえない。

2.2 オキャラハンの批判に対する統合特性理論からの応答可能性

本項では、前項に示した特性理論一般に向けられたオキャラハンの批判を承けて、それらの批判に対して統合特性理論の立場からいかなる応答が可能であるかという点について考察をおこなうことにしたい。なおここでは、オキャラハンによる三つの批判を再掲したうえで、それぞれの批判に対して統合特性理論の立場からいかなる応答が可能であるかを個々に確認することにする。

(1)特性理論によるのでは「要素的諸特性の結合問題」は解決できない

統合特性理論によれば、音は音強、音高、音色という三つの契機が一つにまとめ上げられた統合

音に関するトロープ理論

的特性としてあることから、この統合的特性としての音にあらためて音強、音高、音色という要素的特性が帰属されることはなく、したがって統合特性理論の理解のもとでは端から「要素的諸特性の結合問題」は生じえないことになる。

とはいえ、音強、音高、音色という三つの契機が統合特性としての一つの音にまとめ上げられるそのメカニズムについて十全な解明がなされないかぎりには、「要素的諸特性の結合問題」に対する上記の応答は一種の論点先取 (petitio principii) との誹りを免れえないことになろう^{(8),(9)}。

(2) 特性理論によるのでは音の本質をなすその時間的性格を説明できない

本稿1で確認したように、統合的特性としての音の成立に与る音強、音高、音色という三つの契機はいずれもその持続時間をとおして変化しうるのであるが、このことから明らかなように、音強、音高、音色という三つの契機はそれ自体のうちに可変性（ここでは無変化も可変性の一様態として捉えることにする）を具えると言える。音強、音高、音色という三つの契機が可変性を具えるとするならば、当然ながら、それらの契機からなる統合的特性としての音もまた可変性を具えることになる。

以上の点を踏まえるならば、統合特性理論は「音の本質をなすその時間的性格を説明することができる」とひとまずは結論づけられることになる⁽¹⁰⁾。

しかしながらここで一つ大きな問題が生ずる。特性が普遍者であるかぎりにおいて特性は不変なものと思なされることになるが、統合的特性が特性の一種であるとするならば、統合的特性としての音もまた普遍者としてあり、そのかぎりにおいて本来それは不変なものであるということになる。にもかかわらず、統合的特性としての音が可変性を具えるとするならば、それはきわめて特殊な存在様態をもった特性ということになる。こうした特殊な存在様態をもった統合的特性に関しては、当然ながらその存在様態について特性理論上の明確な説明が求められることになる。

(3) 音は複現可能なものではない

統合的特性もそれが特性であるかぎりにおいて個別者ではなくあくまで普遍者としてあることか

ら、統合的特性としての音は複現可能なものと見なされることになる。すなわち、質的に同一の物理的特性を有する複数の出来事（音源が媒質を攪乱することで圧力波〔音波〕が発生するという出来事）によって統合的特性としての音は例化されることになるのである。

したがって、音が複現可能なものでないことを理由に特性理論に対して向けられるオキヤラハンの批判は、そのまま統合特性理論にもあてはまることになる。

3 音に関するトロープ理論

本稿2.2では、特性理論一般に向けられたオキヤラハンの三つの批判に対して統合特性理論の立場からいかなる応答が可能であるかという点について考察をおこなった。そこでの考察をとおして、オキヤラハンの第一と第二の批判に対しては、統合特性理論の立場から一応の応答は可能であるものの、それらは批判を斥けるだけの十分な説得力をもつとは言い難いものであり、一方第三の批判に関しては、統合特性理論によるのでは批判をかわすことは原理的に不可能であることが判明した。

こうした問題状況を承けて、ここであらたに音をトロープとして捉えることを提案することにした（以下ではこの立場を「音に関するトロープ理論」と呼ぶことにする。なおその略称は「音=トロープ理論」とする）⁽¹¹⁾。

3.1 トロープ理論の種別

一口にトロープ理論といっても、そこには種々さまざまなタイプの理論が認められる。当然のことながら、音をトロープとして理解するにあたっては、その理論的枠組みとしてそれらのうちいずれのタイプのトロープ理論に依拠すべきかが問題となる。そこで本項ではまずは、トロープ理論の分類を試みることにしたい。トロープ理論を分類するにあたっては、アームストロングがArmstrong [1989]で展開する議論がきわめて示唆に富むものと見なされることから (Armstrong [1989]: 16-8, 63-4)、以下ではアームストロングの議論に依拠してトロープ理論の分類を試みることにする。

トロープ理論を分類するにあたってその分類軸をなすものとしては、トロープからなるクラスの構成原理とトロープによる個体の構成原理との二つが挙げられる。前者のトロープからなるクラスの構成原理としては、①自然なクラス (natural class)、②類似性 (resemblance)、③普遍者 (universal) の三種のものがあ、一方後者のトロープによる個体の構成原理としては、①束理論 (bundle theory) と②実体-属性理論 (substance-attribute theory) との二種のものがある⁽¹²⁾。これら二つの分類軸にもとづくならば、各種トロープ理論を体系的に分類するためのマトリックスを構成することが可能となる。

3.2 音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論とその論拠

前項ではアームストロングの議論に依拠してトロープ理論の体系分類法について論じたのであるが、それでは、その体系分類において音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論はそのいずれに位置づけられるのであろうか。

結論から述べるならば、音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論は、類似性をトロープからなるクラスの構成原理とし、実体-属性理論をトロープによる個体の構成原理とする理論であると言える（以下ではこのトロープ理論を「類似性／実体-属性理論」と略称することにする）。

アームストロングは Armstrong [1989] において、競合する他のトロープ理論と比較考量することをおして類似性／実体-属性理論がもっとも見込みのあるトロープ理論であると最終的に結論づけるのであるが、そこでのアームストロングの議論はきわめて説得力に富むものであることから、本稿ではアームストロングにしたがい、類似性／実体-属性理論を音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論に定める次第である。

以下ではアームストロングが競合する他のトロープ理論に対して類似性／実体-属性理論が優位に立つと見なすにあたってその論拠となるものを、Ⅰトロープからなるクラスの構成原理とⅡトロープによる個体の構成原理の両面から確認しておくことにしたい。

Ⅰ トロープからなるクラスの構成原理

(1) 普遍者

普遍者をトロープからなるクラスの構成原理とする普遍者説は、個々のトロープが単一の普遍者を例化することによって、それらのトロープが一つのクラスを構成すると見なす立場であると言えるが、普遍者の導入はトロープを余分なものとし、延いてはトロープ理論自体を破綻させる恐れがあるため、これは厳に斥けるべきものとなる (Armstrong [1989]: 17)。

(2) 自然なクラス

① ウォルターズトルフの議論

アームストロングは、ウォルターズトルフが Wolterstorff [1970] において展開する議論 (Wolterstorff [1970]: 178-81) に依拠して、以下のように論ずる (Armstrong [1989]: 128-9, cf. Armstrong [1989]: 27)。

「クラス A とクラス B という二つのクラスが同一であるのは、クラス A とクラス B の成員が同一であるとき、かつそのときにかぎる」というクラスの同一性条件にしたがうならば、その成員が異なるときクラスは異なることになる。

一方で自然なクラス説によれば、ある特性をもつとはあるクラスの成員であることに他ならないが、しかし仮にそうだとするならば、クラスの同一性条件によれば、クラスの成員が異なるときクラスは異なることになるため、その成員が異なるとき特性はその同一性を保持しえないことになってしまう。

しかしながら実際には、たとえクラスの成員が異なったとしても、特性は同一のものにとどまりうることから、こうした結論は断じて受け入れられないものとなる。こうした誤った結論が導出される原因となったのは、言うまでもなく「ある特性をもつとはあるクラスの成員であることに他ならない」という自然なクラス説の理解にあり、そのかぎりにおいて自然なクラス説は斥けられることになる。

ウォルターズトルフに依拠する上の議論はトロープについても当てはまるが、類似性をトロープからなるクラスの構成原理とするトロープ理論にとってそれは決定的な批判とはなりえない。なぜならば、類似性は「内的関係 (internal relation)」であり、それは各トロープの「個別の本性 (par-

ticularized nature)』⁽¹³⁾に依存するものであるため、クラスの外延が異なったとしても、トロープは同一のものにとどまりうるからである⁽¹⁴⁾。

②トロープとそれらからなるクラスの説明方向 (Armstrong [1989]: 129-30, cf. Armstrong [1989]: 27-8)

自然なクラス説に対する反論として、トロープがあるクラスに属するのは、それが有特性をもつからであって、トロープがある特性をもつのは、それが有特性のクラスに属するからではない、というものがある。

これに類似した議論として、トロープ間に類似性があるのは、それらのトロープがある特性をもつからであって、それらのトロープがある特性をもつのは、それらの間に類似性があるからではない、といったものが挙げられる。一見この議論は、類似性説に対する反論になると見なされるかもしれない。しかしながらこうした反論は、トロープ間の類似性を規定するのはあくまで個々のトロープのもつ個別的本性であって、その逆ではないと考えるならば、これを斥けることができる。

③因果性の問題 (Armstrong [1989]: 130-1, cf. Armstrong [1989]: 28-9)

トロープ説によれば、事物はある特性を具えたトロープをもつことによって因果的に作用することになる。それでは、トロープはいかにしてその特性を具えることになるのだろうか。

自然なクラス説によれば、トロープはある特定のクラスに属することによってある特性を具えることになる。別言するならば、あるトロープが具える特性は当該クラスを構成する成員によって規定されるものと言えるのである。したがって、当該トロープも含めこのクラスの成員であるすべてのトロープが、ある事物が因果的に作用する際に関与することになるが、これは明らかに背理である。

これに対して類似説によるならば、当該クラスに属するトロープ間の厳密な類似性は、各トロープのもつ個別的本性に由来するものであり、この個別的本性は因果的に作用する事物のうちに存することから、因果的作用の原因となるのは、この個別的本性を具えたある特定のトロープに他ならないということになる⁽¹⁵⁾。

以上アームストロングの議論に依拠してトロープからなるクラスの構成原理について検討をおこなってきたのであるが、それを踏まえるならば、トロープからなるクラスの構成原理としては、類似性をトロープからなるクラスの構成原理とする類似性説がもっとも見込みのある立場であると最終的に結論づけられることになる。

II トロープによる個体の構成原理 (Armstrong [1989]: 114-6)

つぎに、なぜアームストロングはトロープによる個体の構成原理として束理論よりも実体-属性理論が優位に立つと見なすのか、その論拠となるものを(1)世界を構成する実体としてのトロープと(2)高階特性に関する説明方式という二つの側面から見ておくことにしたい。

(1)世界を構成する実体としてのトロープ

束理論に対する反論として「トロープは世界を構成する実体として相応しくない」というものが挙げられる。すなわちトロープは他の存在者から独立してそれ自体として存在する実体とは到底認められないというのである。

トロープがそれ自体として存在する実体でないとするならば、トロープをもとに個体を構成する原理としては束理論でなく実体-属性理論が相応しいものとなる。なぜならば実体-属性理論にしたがうならば、トロープはあくまで実体のもつ属性に他ならず、トロープが実体に帰属されることで個体が構成されると見なされるからである。

(2)高階特性に関する説明方式 (Armstrong [1989]: 127-8)

たとえば「赤は色である」という命題における「赤(さ)」は一階の特性トロープを、また「色」は二階の特性トロープをそれぞれ意味するが、この命題は「赤は色である」という事態 (state of affairs)⁽¹⁶⁾を指し示すものと言える。

束理論はこの命題に示される特性トロープ間の階層関係を「赤という特性トロープ(一階の特性トロープ)を構成する束のなかに色という特性トロープ(二階の特性トロープ)が含まれている」という仕方で説明する(すなわち、これを一般化するならば、束理論は n 階の特性トロープを構成する束のなかに $n+1$ 階のトロープが含まれると考えるのである)。

しかしながら東理論のこうした説明方式は「赤は色である」という事態を端的に説明するものとは到底言えない。こうした事情を指してアームストロングは「こうした見解はまったく魅力に欠ける」(Armstrong [1989]: 127) と断じたものと考えられる⁽¹⁷⁾。

それに対し実体一属性理論は、「赤は色である」という命題を「赤という実体（一階の特性トロープ）は色という属性（二階の特性トロープ）をもつ」という仕方でも説明する。すなわち実体一属性理論の説明方式によるならば、一階の特性トロープは実体として定立され、また二階の特性トロープは実体としての一階の特性トロープに帰属される属性として捉えられることになるのである。

あらためて言うまでもなく、実体一属性理論の説明方式は「赤は色である」という命題が指し示す「赤は色である」という事態をより簡明かつ直截に説明するものと言える。その点で、高階特性に関する説明方式としては、実体一属性理論によるそれが東理論によるそれに明らかに優っていると言える。

以上、アームストロングがトロープによる個体の構成原理として東理論よりも実体-属性理論が優位に立つと見なすその論拠となるものを(1)世界を構成する実体としてのトロープと(2)高階特性に関する説明方式という二つの側面から見てきたのであるが、そこでの議論から明らかなように、両理論に関するアームストロングの評価はきわめて妥当なものであると言える⁽¹⁸⁾。

* * *

以上、競合する他のトロープ理論に対して類似性／実体-属性理論が優位に立つとアームストロングが見なすその論拠となるものを、Ⅰトロープからなるクラスの構成原理とⅡトロープによる個体の構成原理の両面から確認する作業に従事してきたのであるが、以上の議論を踏まえるならば、音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論として類似性／実体-属性理論を挙げることはしかるべき妥当性をもつことが明らかとなろう。

3.3 音=トロープ理論の概要

本項では、音=トロープ理論の概要を呈示することに努めるが、ここでの議論の前提としてとくに押さえておくべき論点に以下のものがある。

(1)音=トロープ理論は音に関する特性理論の一種としてある⁽¹⁹⁾。

(2)音=トロープ理論はある意味統合特性理論の進化形として捉えられる。

(3)本稿 3.1 に指摘したように、トロープ理論には種々さまざまなタイプのものがあるのだが、それらのうち音=トロープ理論が依拠するのは、3.2 において Armstrong [1989] におけるアームストロングの議論をもとに検討を加えた類似性／実体-属性理論である。

本項では、まずは音=トロープ理論にもとづく音に関する基本理解を示したうえで (3.3.1)、トロープとしての音を規定する各種パラメータについてその要点を確認するとともに (3.3.2)、トロープとしての音が見える諸特徴について論ずることにする (3.3.3)。

3.3.1 音=トロープ理論にもとづく音に関する基本理解

ここでは、音=トロープ理論のもとで音はいかに理解されるかという点について、四つの側面から論ずることにする。

(1)トロープとしての音はいかなる特性としてあるか

音はトロープとしてあるが、これをさらに特定するならば、音は知覚的特性トロープであるということになる。

音が知覚的特性トロープであるとするならば、音知覚的特性は一般に、音源が媒質を攪乱することによって圧力波（音波）が発生するという出来事（以下これを「出来事音源」と呼ぶことにする）とある聴覚システムを具えた聴覚主体との間に成立する関係的特性であると考えられることから、知覚的特性トロープとしての音もまた出来事音源とある聴覚システムを具えた聴覚主体を関係項とする関係的特性として捉えられることになる⁽²⁰⁾。

(2)トロープとしての音が帰属される対象

音=トロープ理論も、それが特性理論の一種であるかぎりにおいて、音=トロープ理論のもとで

音は、何らかの対象が具える特性、別言するならば、対象に帰属される特性として捉えられることになる。音=トロープ理論はある意味統合特性理論の進化形として捉えることもできることから、この点について統合特性理論との関係においてさらに具体的に述べるならば、トロープとしての音が帰属される対象は、出来事音源であるということになる。

因みに、こうした事態をもっとも適切に反映するトロープ理論は実体-属性理論であると言える。というのも、この理論的枠組みの下では、出来事音源を実体⁽²¹⁾として、また知覚的特性トロープとしての音を実体としての出来事音源に帰属される属性として明確に位置づけることが可能となるからである（まさにこの点に、経済性の点で問題があるにもかかわらず、トロープ理論として束理論ではなくあえて実体-属性理論を採用した理由の一端がある）。

(3)トロープとしての音の時・空間的的定位 (cf. Mourin [2023]: 2.3)

時間と空間は知覚的特性トロープとしての音にとってその現象形式 (form of phenomenon) としてあり、別言するならば、時間と空間は聴覚主体との関係においてはじめて成立する主観的契機としてある。

この音の現象形式としての時間と空間に関して、それぞれの定位についてその要点を示せば以下ようになる。

①時間的的定位：音はその開始点 t_0 と終始点 t_1 によって時間的に定位される。

②空間的的定位：トロープとしての音は出来事音源の位置する場所に定位される。まさにその意味で、音=トロープ理論は遠隔理論⁽²²⁾の一種であると見なされる。またトロープとしての音が定位される出来事音源の位置は、聴覚主体を原点とする距離と方位によって決定される。その意味で、知覚的特性トロープとしての音は、聴覚主体を原点とする「自己中心的空間」のうちに定位されるものと言える。

(4)出来事音源とトロープとしての音との因果関係

出来事音源とトロープとしての音の間には因果関係が成立する。すなわち、出来事音源が原因となってその結果として知覚的特性トロープとし

ての音が生起することになるのである。

3.3.2 トロープとしての音を規定する各種パラメータ

音=トロープ理論の理解では、音は以下に示す各種パラメータによって規定されることになる。

(1)可変性（ある一定の変化パターン）を具えた音高

音高は主観的感觉であり、異なった聞き手は同じ音を異なった音高として受け取ることがありえるため (see Rossing et al. [2014]: 125)、音高を直接的に測定することはできず (Moore [2013]: 203)、音高およびその変化パターンは主観的尺度としてのメル尺度 (mel scale)⁽²³⁾やバルク尺度 (Bark scale)⁽²⁴⁾によって表示されることになる。

(2)可変性（ある一定の変化パターン）を具えた音強

音強もまた主観的感觉であり、個々人で大きく異なりうるため (Rossing et al. [2014]: 116)、音強およびその変化パターンは音強の主観量を示すソーン (sone)⁽²⁵⁾という単位によって表示されることになる。

(3)可変性（ある一定の変化パターン）を具えた音色

音高や音強と同様、音色もまた主観的感觉であると言えるが、音色に関しては音強にとってのソーンや音高にとってのメルやバルクようなタイプの一次元的な主観的な尺度を構成することは不可能であるため (Rossing et al. [2014]: 139, see also Moore [2013]: 285, Roederer [2008]: 155-6) 音色の分析にあたってはSD法 (semantic differential)⁽²⁶⁾や多次元尺度法 (MDS=multidimensional scaling)⁽²⁷⁾を用いて音色を多次元的に捉える必要がある (大山他 [1994]: 1140-1)。

なお上に示した(1)から(3)のパラメータにおいて問題となる「可変性」のうちには無変化も含まれるものとする。

(4)ある特定の開始点と終止点で枠取られた持続

3.3.1にも指摘したように、時間は知覚的特性トロープとしての音にとってその現象形式としてあり、その意味で時間は主観的契機であると言えるのだが、持続が時間的現象であるかぎりにおいて、持続もまた主観的契機であるということになる。

以上音を規定する音高、音強、音色、持続という四種のパラメータについてその要点を確認してきたのであるが、音高、音強、音色、持続の四者を、音を規定するパラメーターとして捉える理解は、色相 (hue)、明度 (value)、彩度 (chroma) という、いわゆる「色の三属性 (three attributes of color)」を色を規定する三種のパラメータとして捉える理解と類比関係にあると言える (cf. Cohen 2009: 4)。

また、音を規定するパラメータをなす音高、音強、音色は可変性 (ある一定の変化パターン) を具えるものであることから、これらによって規定されるトロープとしての音もまたそれ自体として可変性 (ある一定の変化のパターン) を具えることになる^{(28), (29)}。

3.3.3 トロープとしての音が具える諸特徴

音=トロープ理論においては音はトロープとして捉えられるのであるが、音がトロープとしてあるかぎりにおいて、音は以下のような諸特徴を具えることになる。

(1) 個別者としての音

トロープはその本質規定として個別者 (particular) としてあることから (Campbell [1990]: 3-4, Moulin [2002]: 10)、音がトロープとしてあるかぎりにおいて、音もまた普遍者ではなく個別者としてあることになる。たとえばいま仮に A と B という二つの音が存在するとして、その各々を規定するパラメータのすべてが同一であったとするならば、A と B という二つの音は厳密に類似する (exactly resemble) ことになるが、それらの時・空間的定位が異なるとするならば、A と B は別個の音であるということになる (逆に言うならば、パラメータのすべてが同一であり、かつその時・空間的定位が同一の音はただ一つにかぎられることになる)。

(2) 単純な存在者としての音

トロープは単純な存在者 (simple entity) としてあることから (see Moulin [2023]: 2.2)、音がトロープとしてあるかぎりにおいて、音もまた複合的な存在者ではなく単純な存在者としてあることになる。すなわち、上にも見たように、音=トロープ理論のもとでは、音高、音強、音色は、音を構

成する要素的特性としてではなく、音を規定するパラメータとして捉えられることから、音は音高、音強、音色という要素特性から構成された複合的な存在者ではなく、音高、音強、音色等のパラメーターによって規定される一個の単純な存在者であると解されることになるのである。

3.4 オキャラハンの批判に対する音=トロープ理論からの応答

あらためて言うまでもなく、統合特性理論と同様、音=トロープ理論もまた特性理論の一種に数えられるものであり、そのかぎりにおいて、本稿 2.1 に挙げた特性理論一般に向けられオキャラハンの批判はそのまま音=トロープ理論にも向けられることになる。そこで本項では、音=トロープ理論の概要を示した前項における議論を踏まえ、特性理論一般に向けられオキャラハンの三つの批判に対して音=トロープ理論の立場からいかなる応答が可能であるかという点について考察をおこなうことにする。

(1) 特性理論によるのでは「要素的諸特性の結合問題」は解決できない

そもそも「特性理論によるのでは要素的諸特性の結合問題は解決できない」という批判は、音を音高、音強、音色という要素特性からなる複合的特性として捉えるかぎりにおいて問題となりうる批判であると言える。本稿 3.3.2 に指摘したように、音=トロープ理論は、音高、音強、音色を音を構成する要素的特性としてではなく、音を規定するパラメータとして捉えるのであるから、ここにおいては結合問題は端から問題となりえない。

(2) 特性理論によるのでは音の本質をなすその時間的性格を説明できない

本稿 3.3.2 に指摘したように、音=トロープ理論の理解では、音を規定する音高、音強、音色という三種のパラメータはそのいずれもが可変性 (ある一定の変化パターン) を具えるものであることから、これらのパラメータによって規定されるトロープとしての音もまたそれ自体が可変性 (ある一定の変化パターン) を具えることになる。

(3) 音は複現可能なものではない

本稿 3.3.3 で確認したように、トロープはその本質規定からして普遍者ではなく個別者として捉

えられるものであり、そのかぎりにおいてトロープは複現不可能なものであることになる。音=トロープ理論はその名が示すとおり音をトロープとして捉える立場であることから、それがトロープであるかぎりにおいて、音は複現不可能なものであるということになる。

結

本稿においては、統合特性理論の概要を呈示したうえで、特性理論一般に対するオキアラハンの批判に対して統合特性理論の立場からいかなる応答が可能であるかを探ったのであるが、結局のところ、統合特性理論によるのではオキアラハンの批判を全面的に斥けることは不可能であることが明らかとなった。この結果を承けて、統合特性理論の一つの進化形として、音をトロープとして捉える音=トロープ理論をあらたに提案することで、オキアラハンの批判に対して十全な仕方に応答することを企図した。

本稿 3.4 で論じたように、音=トロープ理論は、特性理論に対するオキアラハンのいずれの批判をも全面的に斥けることができるのだが、このことから明らかに、音=トロープ理論は各種特性理論(無論そこには統合特性理論も含まれる)のうちでもっとも見込みのある理論であると言える。

われわれに課された今後の課題は、本稿 3.3 にその基本骨子を示した音=トロープ理論を構成する個々の論点についてさらに検討を加えることでその細部を彫琢し、それによって音=トロープ理論をさらに強靱な理論に鍛え上げることにある⁽³⁰⁾。

註

- (1) 音響哲学を体系的に分類する試みとしては、Kwok [2020]: 57-63 および Casati et al. [2020]があるが、松崎 [2023]: 33-6 ではこれらの論考も踏まえ音響哲学諸理論の体系分類を試みている。
- (2) カサティらも指摘するように、特性理論は少なくとも部分的には、ガリレオやロックといった近代哲学の祖にその淵源を求めることができるが (Casati et al. 2020: § 3.1)、現代の音響哲学においてもこの特性理論を信奉する哲学者が少なからず存在する。

- (3) 特性理論の分類について詳しくは、松崎 [2023]: 34-5 を参照されたい。

- (4) レッディングトンの生起的出来事特性理論と統合特性理論との異同については、松崎 [2023]: 42 を参照されたい。

- (5) 音強、音高、音色を、音知覚的特性 (=音) を規定する三種のパラメーターとして捉えることもできよう。

- (6) 音強、音高、音色という三つの契機はそれぞれが依存する物理的特性を介して相互に関係づけられることになるが、この点が三契機が統合されるにあたって重要な要因をなすものと考えられる (see 松崎 [2023]: 36-8)。

- (7) 特性を普遍者として捉えるのは、特性に関するあくまで一つの理解にとどまり、音が特性であることがただちに音が普遍者であることを含意するわけではないのだが、本文以下に示す、特性理論を批判するにあたってオキアラハンが挙げるとりわけ第二と第三の論拠から、少なくともオキアラハン自身は特性を普遍者として捉えていることが明らかとなる。Cf. Kwok 2020: 101.

- (8) 本稿 1 の註(5)において、音強、音高、音色を、音知覚的特性 (=音) を規定する三種のパラメーターとして捉えうることを指摘したが、仮に音強、音高、音色を、音知覚的特性 (=音) を規定する三種のパラメーターとして捉えんとするならば、「要素的諸特性の結合問題」は生じえないことになる。なおこの点について後段 3.4 であらためて論ずることとする。

- (9) 本稿 1 の註(6)において、音強、音高、音色という三つの契機それぞれが依存する物理的特性を介してこれら三契機が相互に関係づけられるという事実が、三契機が統合されるにあたって重要な要因をなすと考えられるとの指摘をおこなったが、これはあくまで一つの要因にとどまるものであり、これだけで「結合問題」が最終的に解決されるとは断じて言えない。

- (10) オキアラハンもまた、特性としての音を、その同一性条件として時間的変化のパターンを具える複合的な特性として捉えることが可能であることを指摘している。O'Callaghan 2021: § 2.1.3.

- (11) 実はオキアラハン自身、音をトロープとして捉えるならば先の批判をかわしうることを示唆している (O'Callaghan [2007]: 23, O'Callaghan [2021]: § 2.1.3)。ただしオキアラハン自身は、トロープ理論が依拠する形而上学に議論の余地があることを理由に、トロープ理論にコミットすることを避け、この方向性での議論をさらに展開することはない。

因みに、コーヘンもまたオキアラハンと同様、特性をトロープとして捉え返すならば「音は本来特性のような普遍者ではなく個別的個体としてある」という特性理論に対する批判をかわすことができると考えるが、特性理論に対する批判を額面通り受け取る方向で論争に参戦することを企図するとともに、トロープ理論のような特性に関する偏向的理論に本来の特性理論を委ねることを嫌い、特性トロープ理論の採用を控える (Cohen [2010]: 2, n.3)。

(12) サイモンズは Simons [1994] において、トロープを本質的トロープからなる核 (nuclear) とそれ以外のトロープからなる周縁 (periphery) とに二分して捉える「核理論 (nuclear theory)」を提唱するのであるが、サイモンズによれば、核理論は束理論と実体-属性理論を結合するものと言える (Simons [1994]: 568)。

(13) 「内的関係」と「個別的本性」に関する基本理解については Armstrong [1989]: 43-7 を参照されたい。因みに、アームストロングの理解では「トロープとはすなわちその個別的本性に他ならない」ということになる (Armstrong [1989]: 129)。

(14) 自然なクラス説をめぐるウォルターストルフの議論に対して、エーリングは、心身問題 (人格と身体との同一性) にその「対応者理論 (counterpart theory)」を適用する D. ルイスの議論 (Lewis [1983]: 47-54) を援用することでひとつの応答を試みている (Ehring [2011]: 205-8, 216)。

(15) エーリングは、この因果性の問題に起因する自然なクラス説に対する反論が上に見たウォルターストルフの議論にもとづく反論と内的に密接な関係にあると考え、ここでもまたこの反論に対し D. ルイスの「対応者理論」(Lewis [1983]) に依拠して応答を試みる (Ehring [2011]: 222-6)。

(16) 「事態」に関する定義的理解については、Armstrong [1989]: 88 を参照されたい。因みにアームストロングによれば、トロープ理論は、それが束理論、実体-属性理論のいずれであろうと、「事態」の存在を認めなければならないということになる (Armstrong [1989]: 116-7)。

(17) 束理論の蔵する本文に挙げた以外の難点については、アームストロング [2013]: 286-7, 訳者註 (7) を参照されたい。

(18) モーリンは、実体-属性理論の有する一定の長所は認めながらも、結局のところそれが単一カテゴリー存在論の放棄を意味することを理由に、実体-属性理論を斥

ける (Maurin [2002]: 123-7)。

(19) 音に関する特性理論が音響哲学上いかなる位置を占めるかという点については、松崎 [2023]: 33-6 を参照されたい。

(20) さらに言うならば、知覚的特性トロープとしての音は (シューメーカーの言う意味での) 「現象的特性 (phenomenal property)」としてあるのだが、この点については稿をあらためて論ずることとする。なお「現象的特性」について詳しくは、松崎 [2021] および松崎 [2022] を参照されたい。

(21) ここでの「実体」は、アームストロングの言う「厚い意味での実体 (substance in the thick sense)」、すなわち「基体に諸特性を加えたもの (substratum *plus* properties)」を意味する。したがってこうした理解のもとでは、出来事音源は「厚い個別者 (thick particular)」として捉えられることになる。See Armstrong [1989]: 60.

(22) 遠隔理論一般に関しては、松崎 [2023]: 34 を参照されたい。

(23) メル尺度について詳しくは、日本音響学会 [2003]: 377 および Moore [2013]: 215 を参照されたい。

(24) バルク尺度について詳しくは、Rossing et al. [2014]: 126 および日本音響学会 [2003]: 313 を参照されたい。

(25) ソーンについて詳しくは、日本音響学会 [2003]: 218 および Rossing et al. [2014]: 112 を参照されたい。

(26) SD 法について詳しくは、難波、桑野 [1998]: 107-33 を参照されたい。

(27) 多次元尺度法について詳しくは、難波 [1992]: 43-8、難波、桑野 [1998]: 133-9 を参照されたい。

(28) トロープが可変性具える (質的に変化する) という理解は、Audi [2023] に示されている。

(29) トロープとしての音が可変性具える、すなわち時間的に変化するものであるとするならば、音はペロヴィックのいう「TEP トロープ」(時間的に広がる特性トロープ temporary extended property trope) であるということになる。See Perovic [2018]: 9-10.

(30) 音=トロープ理論をより強靱な理論に鍛え上げるにあたってとくに検討を要する課題としては以下のものが挙げられる。

①音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論に関する再検討

本稿 3.2 ではもっぱら Armstrong [1989] におけるアームストロングの議論に依拠して、類似性/実体-属性理論を音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論に

定めたが、その考察範囲をさらに拡張し今日の視点からとくに重要と見なされる種々のトロープ理論についてもあわせて検討をおこなうことにより、あらためて音=トロープ理論が依拠すべきトロープ理論はいかなるものであるべきかを考える。

②音=トロープはいかなる特性であるかに関する考察

音=トロープ理論における音=トロープは、特性トロープの一種であると言えるが、この特性トロープはいかなる特性として捉えられるかという点について特性理論の枠組みのもとに検討を加える。

③トロープとしての音を規定する各種パラメータに関するさらなる究明

本稿 3.3.2 において音を規定するパラメータとして挙げた音高、音強、音色、持続の相互関係を明らかにしたうえで、あらためてこれらを独立したパラメータとして定立する方策を講ずるとともに、これら四種のパラメータを同一次元のもとに捉える可能性を探る(音高、音強、持続が一次的な尺度のもとに捉えられるのに対し、音色は本質的に多次元的なパラメータとしてあることから、ここでの問題の核心は、音色を一次的な尺度に還元することは可能か、もし可能であるとするならば、それはいかなる方途によるかを究明することにある)。

参考文献

- Armstrong, David M. [1989]. *Universals: An Opinionated Introduction*. Boulder: Westview Press (デイヴィッド・M・アームストロング『現代普遍論争入門』秋葉剛志訳, 春秋社, 2013年).
- Audi, Paul. [2023]. "Tropes and Qualitative Change." *Noûs*: 1-22.
- Campbell, Keith. [1990]. *Abstract Particulars*. Oxford: Basil Blackwell.
- Casati, Roberto, Jérôme Dokic, and Elvira Di Bona. [2020]. "Sounds." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2020 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2020/entries/sounds/>>.
- Cohen, Jonathan. [2010]. "Sounds and Temporality." In: Zimmerman [2010]: 303-20.
- Ehring, Douglas. [2011]. *Tropes: Properties, Objects, and Mental Causation*. Oxford: Oxford University Press.
- Kulvicki, John. [2008]. "The Nature of Noise." *Philosophers' Imprint* 8 (11): 1-16.

- . [2015]. "Sound Stimulants: Defending the Stable Disposition View." In: Strokes et al. [2015]: 205-21.
- Kwok, Calvin K. W. [2020]. *Hearing Waves: A Philosophy of Sound and Auditory Perception*. Dissertation, The University of Hong Kong. URL = <<https://philpapers.org/archive/KWOHWA.pdf>>.
- Leddington, Jason P. [2019]. "Sounds Fully Simplified." *Analysis* 79 (4): 621-29.
- Lewis, David. [1983]. "Counterparts of Persons and Their Bodies." In his *Philosophical Papers Volume 1*. Oxford / New York: Oxford University Press: 47-54.
- Maurin, Anna-Sofia. [2002]. *If Tropes*. Dordrecht: Kluwer Academic Publications.
- . [2023]. "Tropes." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2023 Edition), Edward N. Zalta & Uri Nodelman (eds.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/spr2023/entries/tropes/>>.
- Moore, Brian C. J. [2013]. *An Introduction to the Psychology of Hearing*. Leiden: Brill.
- O'Callaghan, Casey. [2007]. *Sounds: A Philosophical Theory*. Oxford / New York: Oxford University Press.
- . [2021]. "Auditory Perception." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2021 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2021/entries/perception-auditory/>>.
- Pasnau, Robert. [1999]. "What is sound?" *Philosophical Quarterly* 49: 309-24.
- Perovic, Katarina. [2018]. "What is a Fourdimensionalist to Do about Temporally Extended Properties?" *European Journal of Philosophy*: 27 (2): 441-52.
- Roberts, Pendaran. [2017]. "Turning up the Volume on the Property View of Sound." *Inquiry: An Interdisciplinary Journal of Philosophy* 60 (4): 337-57.
- Roederer, Juan G. [2008]. *The Physics and Psychophysics of Music: An Introduction*. 4th edition. New York: Springer (ローダラー, ホアン・G. [2014]. 『新版 音楽の科学——音楽の物理学、精神物理学入門』高野光司, 安藤四一訳, 音楽之友社, 2014年).
- Rossing, Thomas D., Richard F. Moor, and Paul A. Wheeler. [2014]. *The Science of Sound*. Third Edition. Edinburgh Gate: Pearson.
- Simons, Peter. [1994]. "Particulars in Particular Clothing: Three Trope Theories of Substance." *Philosophy*

- and Phenomenological Research* 54: 553-75 (ピーター・サイモンズ「個別の衣をまとった個別者たち——実体に関する三つのトロープ説」柏端達也, 青山拓央, 谷川卓編訳『現代形而上学論文集』所収, 251-301頁, 勁草書房, 2006年).
- Strokes, Dustin et al. [2015]. *Perception and Its Modalities*. Oxford / New York: Oxford University Press.
- Wolterstorff, Nicholas. [1970]. *On Universals: An Essay in Ontology*. Chicago / London: The University of Chicago Press.
- Zimmerman, Dean. [2010]. *Oxford Studies in Metaphysics*. Vol.5. Oxford / New York: Oxford University Press.
- 大山正, 今井省吾, 和気典二編. [1994]. 『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック』誠信書房.
- 難波精一郎. [1992]. 『音色の測定・評価法とその適用例』応用技術出版.
- 難波精一郎, 桑野園子. [1998]. 『音の評価のための心理学的測定法』コロナ社.
- 日本音響学会編. [2003]. 『新版 音響用語辞典』コロナ社.
- 松崎俊之. [2021]. 「現象学的フレーゲ的表象主義にもとづく知覚的クオリアと美的クオリアに関する理解」, 『芸術文化』第26号, 123-49頁.
- . [2022]. 「現象的特性について——シェーメーカーの議論に依拠して」, 『石巻専修大学 研究紀要』第33号, 43-55頁.
- . [2023]. 「音に関する統合特性理論」, 『石巻専修大学 研究紀要』第34号, 33-45頁.